

巻頭言

「建物を壊して建てる」

理事長 新谷友良

今年も終わります。新型コロナウイルス感染の大きなうねりの中でロシアのウクライナ侵攻があり、エリザベス女王が亡くなり、大谷選手や村上選手の活躍があり、オリックスが26年ぶりに日本一になりました。そんな中、気持ちが落ち込むニュースが二つありました。

一つは三宅坂の国立劇場・国立演芸場が老朽化に伴って建て替えになるというニュース。歌舞伎や文楽などの伝統芸能と落語・講談などの演芸の拠点でしたが、今は「さよなら公演」が来年10月まで行われています。そのあと6年かけて再整備が行われて、新たな劇場がオープンするのは2029年秋。ホテルやレストランが併設されると発表されています。

もう一つは、神宮外苑の再開発で老朽化した神宮球場と秩父宮ラグビーが壊されて、神宮球場は現在の場所から、イチヨウ並木のすぐ側に場所を移され、神宮球場跡地に新秩父宮ラグビー場が造られるというニュース。新秩父宮ラグビー場は国立競技場よりも10mほど高いドーム型スタジアムに生まれ変わり、2027年には使用開始で屋根付き人口芝生の「様々なシーンに対応できる誰もが心地よいスタジアム」となるそうです。

最近、新しく建てられる大型施設は、「誰にも開かれた施設」を謳い文句に、ビジネスエリアとホテルが併設されるのが常になっています。明治神宮外苑の再開発は、外苑内の1千本近い樹木が伐採される計画がされていて、イチヨウ並木の保全をめぐる議論が噴出していますが、古びた建物の取り壊しや木を切る決断をだれがどのようにしているのか、その姿がなかなか想像できません。

改築に改築を重ねた年代物の建物は建付けの良くないところが目につきます。それでも国立劇場の待合の椅子は背もたれもない木の長椅子ですが、演目について想像をめぐらすのに格好の硬さでした。秩父宮のバックスタンドの入り口近くには駐輪場があり、自転車を止めてそのまま満員のスタンドに上がっていくことができる非常に親しみの持てる建物でした。国立劇場も秩父宮ラグビー場も個人的に思い出深い建物です。新しい建物はできあがるまで時間がかかり、それ以上に馴染むまでに時間がかかります。何回かのお屠蘇をいただける間に馴染むことができればと願っています。皆さま、お元気に、よいお年をお迎えください。